

所長挨拶

長岡 洋介（基研）

京都大学基礎物理学研究所と広島大学理論物理学研究所は1990年6月8日付で統合し、新・基礎物理学研究所（Yukawa Institute for Theoretical Physics）として再発足した。両研究所の統合に至るまでの沿革は表1の通りである。

表 1 沿 革

京都大学基礎物理学研究所	広島大学理論物理学研究所
1952年 7月 京都大学に湯川記念館設置	1944年 8月 広島文理科大学に「理論物理学研究所」設置
1953年 8月 「基礎物理学研究所」設置	「重力理論」部門設置
「場の理論」「中間子論」部門発足	1945年 8月 広島に原子爆弾投下
9月 国際理論物理学会議	尾道市の広島文理科大学附属臨海実験所の一部を仮庁舎とする
1954年 4月 「原子核理論」「物性論」部門増設	1948年 3月 竹原町（現竹原市）に移転
1960年 3月 北側研究棟増築	1949年 5月 新制広島大学設置、広島大学附属研究所となる
1965年 9月 中間子論 30周年記念「素粒子論国際会議」	1960年 4月 「場の理論」部門増設
1969年 6月 共同利用研究者宿泊施設「北白川学舎」設置	1965年 4月 「時間空間理論」部門増設
1978年 9月 第1回京都サマー・インスティテュート（KSI）、以後毎年開催	1967年 3月 新庁舎完成
1980年 4月 「統計物理学」部門（時限7年）増設	1973年 4月 「宇宙論」部門新設
1982年 4月 外国人客員部門「理論物理学」増設	1989年 12月 創立45周年記念シンポジウム「素粒子・重力・宇宙」
1985年 2月 湯川記念室完成	
1985年 8月 中間子論 50周年記念国際会議（MESON50）	
1987年 4月 「統計物理学」部門時限到来により廃止	
「非線形物理学」部門（時限10年）増設	
1990年 6月 広島大学理論物理学研究所と統合	

基研の歴史をたどると、1970年までの湯川所長時代、1970年～1990年の時期、そして今年からの統合以後と、3つの時期にはっきり区分されるように思われる。統合は基研にとって大きな変革であり、統合によって基研は未経験の新しい時代に入ったといえる。

新・基研の部門、人員等の現状を表2に示した。この他、固有部門として「非平衡系物理学」、「クォーク多体論」、ほかに外国人客員部門の増設の計画がある。1979年に基研は将来計画をたてた。そのときの計画にある部門構成、人員は表3の通りである。

表 2 定 員

区 分	教授	助教授	助手	事務官	一般職員	合計
一般相対論部門	1	1				2
統計力学部門	1	1	1			3
原子核理論部門	1	1	2			4
素粒子論部門	1	1	1			3
物性論部門	1	1				2
場の理論部門	1	1	1			3
時間空間理論部門	1	1	1			3
宇宙基礎論部門	1	1				2
非線形物理学部門	1	1				2
素粒子論的天体物理学部門(外国人客員)	1					1
事 務 部				6	7	13
合 計	9 + 1	9	6	6	7	37 + 1

表 3 1979年当時の基研の将来計画

場の理論	定員 固有部門	28
素粒子理論	客員部門	4
原子核基礎論	外国人客員部門	4
物性基礎論		
統計物理学		
宇宙物理基礎論		
非線形物理学		
客員部門	2	
外国人客員部門	2	

表 4 学振特別研究員の数

	1988		1989		1990	
	継続	新規	継続	新規	継続	新規
素粒子	1	4	4	5	5	1
核・宇宙	1	2	2	1	1	2
物性		1	1	2		
計	9		15		9	

当時、基研は創設当時のままの4部門をもつのみであった。その後、この計画のうち固有部門1、外国人客員部門1が実現した。計画と現状を比較すると、固有部門数はすでに計画を上まわっていることがわかる。人員も計画のそれに近い。もちろん、大きくなったからといって、現在のように北白川・宇治と分かれていては、大きくなったことの利点を生かすことは難しい。なんといっても、建物問題の早期解決を図らなければならない。今年の図書予算は北白川2,200万円、宇治1,400万円だが、これをまとめて使えるようになれば、図書の整備も格段に進むはずである。

共同利用、国際交流の面でも、統合に伴い若干の改善がなされた。共同利用のための員等旅費は当初配分で89年度の1,600万円から90年度は2,300万円（基準改訂分を含む）に、共同利用校費は2,440万円から2,780万円に増額されている。十分とはいえないが、それでもかなりの改善である。文部省の招聘外国人研究員（短期、3ヶ月以上）も89年は4名であったものが、90年には6名認められた。これらの枠を有効に利用すれば、例えば国際的なワークショップの開催など、新しい試みを行う事も不可能でない。

若手研究者に関しても、ここ数年、基研にはかなりの数の学振特別研究員が滞在している（表4）。ほかに、湯川財団の援助による基研研究員を毎年3名採用している。学振の特別研究員が基研に集中することには問題もあるが、基研の側から見ると、これだけの若手のactivityをどのように生かしていくかが重要な課題である。要するに、統合によって新しい革袋が準備されたといえるのではないだろうか。もちろん、建物のことが解決しないというちは、袋の口が開かないようなものだし、制度上の制限が袋に酒を入れにくくしている面もある。袋の容積も十分とはいえないかも知れない。しかし、袋の口は近い将来開くと思っている。いま、大事なことは、その袋にどのような酒をもるか、われわれ自身の問題として考えることだと思う。考え、決めて、実行すれば、やれることはいくつもあるはずだ。

討論

鈴木増：助手の振替のことで聞きたいのですが、現在の助手の人員は何名ですか。

長岡：5名で北白川3名、宇治が2名。

鈴木増：さらに2から3に減らして振り替えるのですか。

長岡：先ほどの学振の件も含めて、そういう方向に向かうこともあり得ます。

牧：大学院センターのことで、概算要求の折、文部省の方から間口が狭すぎるという言葉われたことをコメントしときます。

基研に期待するもの

柳田 勉（東北大理）

シンポジウムの講演を頼まれました時、この新しい基研に私が何を期待しているかをお話するつもりで上記の題名に致しました。例えば、国際的な研究所、充実したビジター制度等々と色々な夢は持っております。しかしそのようなバラ色な事をお話するよりも、私が基研について日頃から気にしている問題点について率直に述べる方が、すこしでもお役に立つのではないかと思います、題名を「基研の問題点」と変更させていただきます。

基研はこの春に理論研との合併により、30名近い所員を持つ研究所になりました。30名という数は大きな大学の物理学科の教官の数に匹敵し、しかも全員が理論物理学の研究者であることを考えると、非常に大きな研究所に生れ変わったこととなります。予算の規模も大きく拡大した訳ですから、今までになかったような側面を期待するのは当然だと思います。特に、国際的な研究所つまり外国からの優秀な研究者が常時複数名滞在し、国内からは多くの方が基研に出かけて行き、互いに物理の議論が出来るような研究所を望んでいる人達は少なくないと思います。このような研究所を作るためには、経済的バックグラウンドは当然必要ですが、基研自身が、目玉になるような魅力的な人材を確保する必要があります。このような基研の柱になるような方々に、長期的展望のもとに責任ある運営をある程度任せる方が良いのではないかと思います。もちろん、このためには任期制の見直しをやる必要があります。

この任期制の弊害はまた別の意味でも、現在の基研（北白川）にあらわれている気がしています。所員一人一人は非常に優秀な方々で、立派な実績も上げておられるのですが、何か基研（の素粒子論グループ）としてのまとまりとか所員間のつながりというものが感じられません。これが任期制のために、基研の運営に参加する余裕が所員の方にはないためだと言う